日本聖公会浦和諸聖徒教会の復原研究

Keywords
聖公会　北関東教区　鐘楼　上林敬吉
J.M.ガーディナー　復原　文化財的価値

AK12092　福田　和美

1.　はじめに

1.1　研究背景・目的

キリスト教において東方正教会、ローマ・カトリック、プロテスタントは代表的な宗派である。本研究の対象である「聖公会」は、英国国教会系の教会で、プロテスタントの教派のひとつである。

日本聖公会大宮聖愛教会と日本聖公会浦和諸聖徒教会（**写真1**）は本年の埼玉県近代和風建築総合調査の対象となり、文化財として適するかどうか審査されている。本研究では昭和47年に行われた改修工事によって失われた浦和諸聖徒教会の姿をCADを使って三次元復原する。また、さまざまな聖公会及び他宗派の教会堂の見学・分析から宗派による建築的特徴を考察し、研究対象の聖公会教会建築としての文化財的価値を検討していく。

1.2　研究方法

(1)日本聖公会大宮聖愛教及び日本聖公会浦和諸聖徒教会の実測調査を行う。

(2)浦和諸聖徒教会について、実測図面と現建物の痕跡を基にCADを使って改築前の形態を三次元に立ち上げる。

(3)複数の聖公会教会及び他宗派の教会を見学・分析し、とくに浦和諸聖徒教会において聖公会教会建築としての文化財的価値を検討する。

1.3　実測調査

(1)日本聖公会大宮聖愛教会
調査日：2015年8月17日
所在地：埼玉県さいたま市大宮区桜木町2-172

(2)日本聖公会浦和諸聖徒教会実測調査
調査日：2015年8月17日
所在地：埼玉県さいたま市浦和区仲町2-10-19

表1　大宮聖愛教会及び浦和諸聖徒教会概要

	(1)大宮聖愛教会	(2)浦和諸聖徒教会
竣工	昭和 9 年(1934)	昭和 3 年(1928)
改築		昭和 47 年(1972)
設計者	上林敬吉	上林敬吉
構造	鉄筋コンクリート造	鉄筋コンクリート造

両教会の概要は**表1**に示すとおりである。本研究では浦和諸聖徒教会を対象の中心として進めていく。

2.　浦和諸聖徒教会

2.1　沿革

浦和諸聖徒教会の前身は明治32年(1899)に北足立郡浦和町に開設された講義所である。そして明治35年(1902)に旧礼拝堂が建てられ「浦和諸聖徒教会」と命名されたのち、隣接して浦和幼稚園も開園した。さらに昭和3年(1928)には埼玉県浦和町に現在の礼拝堂が建てられた。アメリカ人建築家J.M.ガーディナーの弟子であった上林敬吉が設計したこの礼拝堂は、浦和町で最初の鉄筋コンクリート建造物であった。

2.2　現在の形態

現在の建物は鉄筋コンクリート造の平屋建てで、木造の小屋組をもつ単廊式の礼拝堂である。中央の身廊部と建物東の祭壇部分の棟位置は同じで切妻だが、入口に続く西側前室の棟は低く寄棟である。祭壇の南側に位置するVestryと呼ばれる祭具室は陸屋根である。外壁にはバットレスがありその間に2連の尖頭アーチの窓が設けてある。建設当初は道路に面した北側に鐘楼があったが、明治47年(1972)に行なわれた道路の拡張工事のため改築され取り壊された。またその際に玄関部分も縮小しており、現在この玄関は使われていない。(**図1**参照)

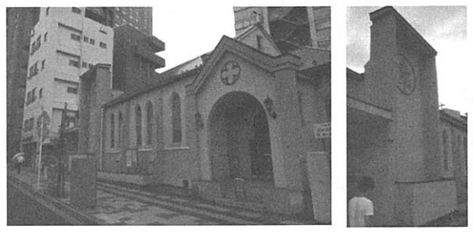


写真1,2　浦和諸聖徒教会　外観・鐘楼跡

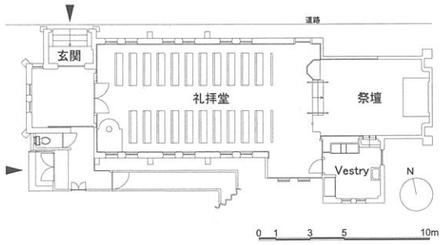


図1　浦和諸聖徒教会　現状平面図

3.　浦和諸聖徒教会の復原

実測調査時の図面と現建物の痕跡に基づき、浦和諸聖徒教会の改築前の形態をCADを使って復原した。復原平面図を**図2**に、三次元復原を**図3**、**4**に示す。

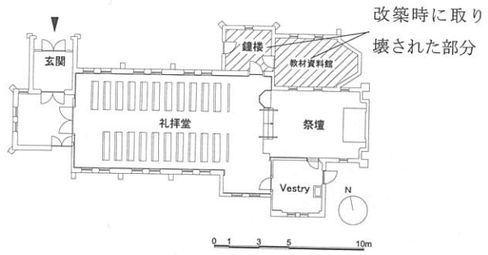


図2　浦和諸聖徒教会　復原平面図

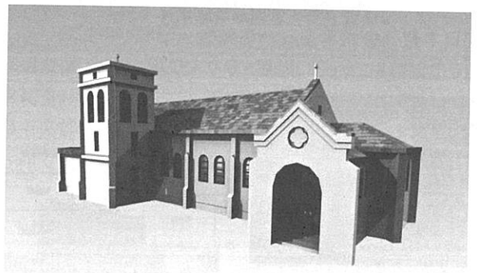


図3　浦和諸聖徒教会　3次元復原図(外観)

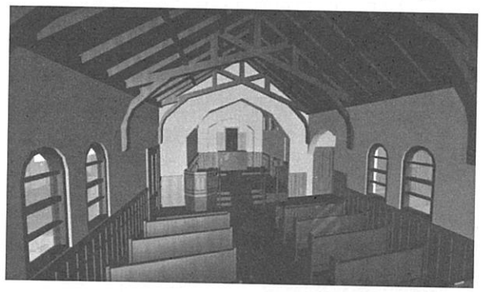


図4　浦和諸聖徒教会　3次元復原図(内観)

4.　聖公会について

4.1　アングリカン・コミュニオン

聖公会とはイングランド国教会の系統に属する教派である。聖公会は自らを西方教会におけるカトリックとプロテスタントの中間として位置づけている。世界各国にある聖公会の諸教会の世界的連合をアングリカン・コミュニオンと呼ぶ。日本聖公会もアングリカン・コミュニオンの形成団体のひとつである。

4.2　日本聖公会の系譜

聖公会が日本で宣教を開始したのは安政6年(1859)で、最初の聖公会の教会は長崎の出島に建てられた。明治2年(1859)には拠点を長崎から大阪に移し、さらに明治7年(1874)には首都東京に米国聖公会ミッション本部が設けられた。〝米国ミッションは日本に建物をつくった〟と言われているほど米国ミッションが建てた教会堂は立派なものが多く、まちの象徴として大事にされてきたものばかりである。米国ミッションの地方伝道は川越から始まり、熊谷や日光、宇都宮、高崎などの北関東に広がっていった。浦和と大宮の伝道が開始されたのは明治32年(1899)のことであった。

5.　文化財の教会建築見学

5.1　聖公会の教会堂

浦和諸聖徒教会の聖公会教会建築としての価値を審議するにあたり、聖公会教会建築の特徴を把握する必要があると考えた。そのため今回は**表2**に示す、関東地方にある国の登録有形文化財の聖公会教会建築の見学を行った。このうち(1)～(4)は北関東教区(茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県)にあるものであり、浦和・大宮の教会と同じ管轄内のものである。

表2　聖公会の教会堂

	名称
聖公会	(1)宇都宮聖ヨハネ教会
	(2)日本聖公会高崎聖オーガスチン教会
	(3)日本聖公会熊谷聖パウロ教会
	(4)日本聖公会川越キリスト教会
	(5)茂原昇天教会
	(6)日本聖公会浅草聖ヨハネ教会
	(7)東京諸聖徒教会

※関東地方にある登録有形文化財が対象

(1)宇都宮聖ヨハネ教会（昭和8年竣工）

RC造大谷石張りの宇野宮聖ヨハネ教会は、浦和・大宮の教会と同じく、上林敬吉が設計した教会堂である。単廊式の礼拝堂で、祭壇の北西側にVestryと呼ばれる祭具室がある。(**写真3,4**、**図5**参照)

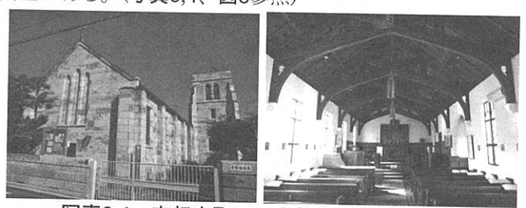


写真3,4　宇都宮聖ヨハネ教会　外観・内観

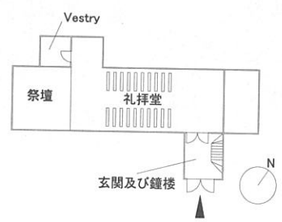


図5　宇都宮聖ヨハネ教会　平面図図

(2)日本聖公会高崎オーガスチン教会（昭和4年竣工）

RC造大谷石張りで、単廊式の礼拝堂から祭壇にわたり天井はひと続きになっている。祭壇の北側にVestryがある。(**写真5,6**、**図6**参照)

写真5,6　高崎聖オーガスチン教会　外観・内観

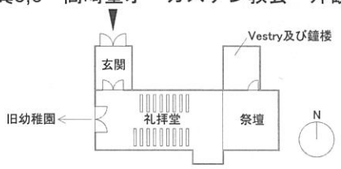


図6　高崎聖オーガスチン教会　平面図

(3)日本聖公会熊谷聖パウロ教会（大正8年竣工）

アメリカ人建築家W.ウィルソン設計の煉瓦造で、玄関部分の上部が鐘楼になっている。内部は単廊式であり、祭壇の南側にVestryがある。(写真7,8、図7参照)

写真7,8　熊谷聖パウロ教会　外観・内観

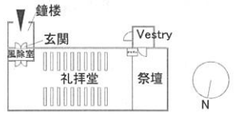


図7　熊谷聖パウロ教会　平面図

(4)日本聖公会川越キリスト教会（大正10年竣工）

熊谷の教会と同じ、深谷煉瓦を使用した煉瓦造で、設計者も同じくW.ウィルソンである。単廊式の礼拝堂で、祭壇の北側にVestryがある。(写真9,10、図8参照)

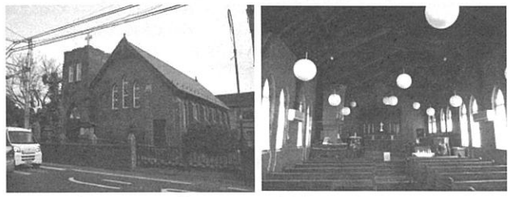


写真9,10　川越キリスト教会　外観・内観

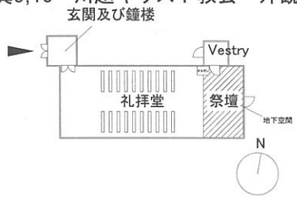
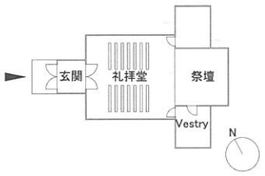


図8　川越キリスト教会　平面図

(5)茂原昇天教会（昭和8年竣工）

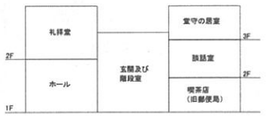
木造の単廊式教会堂である。天井の形態は礼拝堂部分と祭壇部分で異なる。玄関は祭壇の正面にある。祭壇の両脇に部屋があり、片方はVestryである。(写真11、図9参照)



(左)写真11　茂原昇天教会　外観
(右)図9　茂原昇天教会　平面図

(6)日本聖公会浅草聖ヨハネ教会（昭和4年竣工）

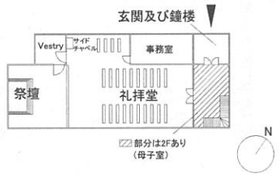
RC造2階建て(一部3階建て)の大規模な教会堂である。



(左)写真12　浅草聖ヨハネ教会　外観
(右)図10　浅草聖ヨハネ教会　概要図

(7)東京諸聖徒教会（昭和6年竣工）

RC造の教会堂で、玄関の上部が鐘楼になっている。内部は単廊式で、天井が張ってあるので小屋組は見えない。(写真12,13参照)



(左)写真13　東京諸聖徒教会　外観
(右)図11　東京諸聖徒教会　平面図

見学した日本聖公会の教会建築に多く見られる特徴は、単廊式の礼拝堂であること、祭壇の脇にVestryと呼ばれる祭具室が設けられていることなどである。さらに浦和・大宮の教会が所属する北関東教区の教会に見られる建築的共通点としては、その規模がおおよそ同じであること、単廊式の礼拝堂である矩形の平面に、鐘楼や玄関、Vestryなどが附属的に設けられている形態であること、内部空間は小屋組があらわになっており、雰囲気がどれも類似していることなどが挙げられる。また日本聖公会は教区ごとに意識を統一させるため、牧師が3年ごとに教会を移動して管理することになっている。これらのことから、聖公会の教会建築はその教区ごとに特徴が色濃く現れていると推察できる。

5.2　他宗派の教会見学

キリスト教の代表的な宗派である正教会・カトリック・プロテスタント(聖公会を除く)の教会建築のうち、関東地方における重要文化財及び有形文化財(表3)を見学し、他宗派の教会建築の特徴を明らかにしていく。

表3　重文・有形文化財(関東地区)

教派・宗派	名称
正教会	(1)東京復活大聖堂(ニコライ堂)
カトリック	(2)カトリック松が峰教会
	前橋カトリック教会
	カトリック神田教会
プロテスタント（聖公会を除く）	(3)日本基督教団島村教会
	日本基督教団佐野教会
	日本基督教団九十九里教会
	日本基督教団根津教会
	日本基督教団本郷中央教会
	日本基督教団富士見丘教会
	日本基督教団横須賀上町教会

(1)東京復活大聖堂（ニコライ堂）（明治24年竣工）

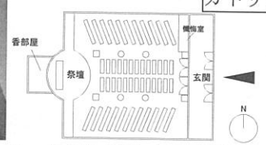
煉瓦造および石造で、平面はギリシャ十字形である。内部中央部の各隅にペンデンティブがあり、ドームが架けられている。(写真14、図11参照)　正教会

(左)写真14　東京復活大聖堂　外観
(右)図12　東京復活大聖堂　平面図

(2)カトリック松ケ峰教会（昭和7年竣工）

RC造で西側に双塔が付いているのが特徴的。3廊式バシリカのロマネスク様式である。(写真15、図12参照)

カトリック

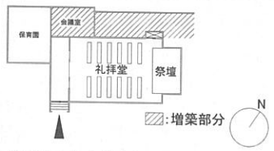


(左)写真15　カトリック松ケ峰教会　外観
(右)図13　カトリック松ケ峰教会　平面図

(3)日本基督教団島村教会（明治30年竣工）

木造で単廊式の礼拝堂である。杉板の床張り、真壁漆喰塗りに腰壁、天井は竿縁である。(写真16、図13参照)

プロテスタント



(左)写真16　日本基督教団島村教会　外観
(右)図14　日本基督教団島村教会　平面図

正教会・カトリック・プロテスタントの教会堂においては、その規模や平面形態は教会ごとにそれぞれ異なり、雰囲気もさまざまであった。ただ、カトリックの教会堂は比較的大規模で、側廊のある3廊式バシリカである傾向があり、プロテスタントは民家をそのまま教会として使用しているような佇まいのものも少なくなかった。また祭具室の有無や位置については宗派によって明らかに異なっていた。聖公会の教会堂では祭壇の脇に位置していた祭具室が、カトリックでは祭壇裏にあり、正教会とプロテスタントでは存在しないことがわかった。

6.　まとめ

上記を踏まえ、浦和諸聖徒教会の聖公会教会建築としての文化財的価値を考察する。

①本教会の設計者である上林敬吉は、さまざまな聖公会教会建築の設計に携わったアメリカ人建築家J.M.ガーディナーの弟子であることから、外国人建築家の偉業が日本人建築家によって継承されていった証としての建築史的価値があると言える。

②本教会が浦和町における最初の鉄筋コンクリート造であったことから当時の浦和町を象徴する建物であったことが推察でき、地域社会の中での存在価値を裏付けることができる。

③本教会は北関東教区の聖公会教会建築に見られる特徴である、比較的小規模な教会堂や平面形態、鐘楼やVestryという附属部屋の存在や小屋組などが顕著に表れていることから、聖公会教会としての特徴を有していると言える。

以上3点から研究対象である浦和諸聖徒教会は、聖公会教会建築としての文化財的価値があると考える。しかしながら昭和47年(1972)に行われた改築工事によってその特徴のひとつである鐘楼が取り壊されてしまったことは、本教会の文化財的観点からすると残念なことである。それゆえ本研究において、本教会がより聖公会教会の特徴を持っていた改築前の姿を三次元復原することにより、本教会の価値を改めて確かめることが出来た。

参考文献

1)「日本聖公会北関東教区　目で見る教区のあゆみ」，日本聖公会北関東教区，2014年
2)「浦和諸聖徒教会100年史」，日本聖公会北関東教区，2007年
3)「大いなる遺産　長崎の教会」，三沢博昭・川上秀人，株式会社智書房，2000年
3)「日本近代建築大全 東日本扁」，米山勇・伊藤隆之，講談社，2010年
4)「関東の近代キリスト教建築の現在」，社団法人 日本建築学会，2012年
5) 日本聖公会北関東区HP
URL(http://nskk-kitakanto.org/index.html)